

地域の素材を活かした色を使った遊び

明星幼稚園 安部 志歩



【とくべつな たからもの びじゅつかん】

1. はじめに

令和3年度より、「地域の素材」を使つての遊びを子どもたちと楽しむため、血の池地獄の泥を活用し、子どもたちが生活している別府という地域にどんな良さがあるか、そこで受けている自然の恵みはどんなものか、実際に触れながら、感じたこと、発見したことを友だちや保育者と共感できたらと考え、遊びを展開してきた。

今年度の内容は、令和4年から令和5年にかけて行った、1年間の「いろ」の取り組みについてのまとめである。子どもたちが、1年経験してきた遊びを、そこから自分たちで発展させ、血の池地獄の泥や、カボスなど、私たちの地域にある身近なものを使い、自分たちが「またしたい」という思いを感じたり、自分たちのしたい遊びを満足感を味わいながら友だちと遊んだり、素材その物の感触を楽しんだりできることを期待して活動に取り組んできた。

2. 研究の内容及び方法

(1) 研究内容

- ① 自分たちの住む地域の自然の素材を知り、それを使った遊びを楽しむ。
- ② 素材に触れてみたり、自由に遊んだりして、素材そのものの感触を楽しむ。
- ③ 地域のすばらしさを親子で感じる。

(2) 研究方法

- ① 砂場の砂や園庭の土、地獄の泥に触れて、そのものの感触の違いに気づく。
- ② 遊びの中で身の周りの花や実のいろに興味を持ち、色水遊びをしたり、他の色と混ぜて色の変化を楽しんだりする。いろいろな素材や道具を使って遊び、発見したことを言葉にする。
- ③ 実際に血の池地獄に見学に行き、自然の素晴らしさを感じる。
- ④ 自由に遊ぶ時間を十分に確保し、子どもたちの活動を保護者の方に発表する場を設ける。

3. 実践事例

【令和4年12月】 事例1『血の池地獄に行ってみよう』

令和4年6月に、子どもたちと一緒に遊びを通して、血の池地獄の泥を紹介し、地域の素材として活用してきた。子どもたちは興味を持ったが、実際は血の池地獄に行ったことがなく、写真でしか見たことがなかった。そこで、血の池地獄に行き、どのようなところに泥があるのか、どれくらいあるのか、どんな匂いなのかなど、その様子を実際に見学に行くことにした。

いざ、行ってみると、初めて見る血の池地獄に、大喜びと、驚きの子どもたち。「こんなに大きいんだね」「泥はどこにある?」「湯気が出ているから、温泉だ!」「端っこに泥の塊がある」「色が所々ちがう」など、気づきや驚きを次々言葉に出した。実際、血の池地獄に行ったことで、夏から遊びや作品作りで活用してきた泥がこのような場所にあることを知ることができた。



【初めての血の池地獄にドキドキ】



湯気がたくさん!!
血の池地獄の泥って
たくさんあるんだね!!

【令和5年1月～2月①】 事例2 『血の池地獄の泥やカボスなど身近な素材を活用して遊ぼう』

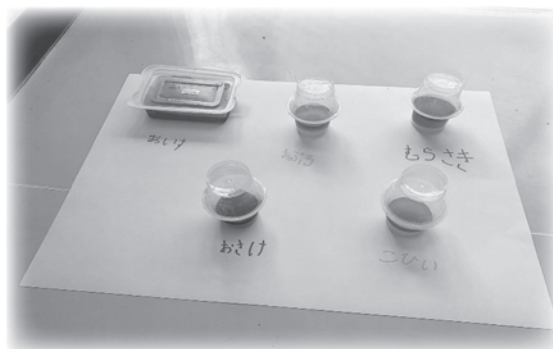
これまで血の池地獄の泥で絵を描いたり、染物をしたりし、また草花を使った色水づくりをしたりしてきた。それらの色の変化を楽しんできた子どもたちと、今回は自分たちがしたい遊びを存分にできる時間を確保した。今まで、どのような遊びがあったか話をしながら振り返り、子どもたちと色について話を進めた。遊びに対して楽しいという気持ちを感じ、経験してきた子どもたちなら、「またしたい」という感想や、「ほかにはどんなことができるだろう？」という思いが生まれると考えた。すると、慣れ親しんできた地獄の泥を使って染物をしたり、絵を描いたりする子もいれば、伽藍岳の岩を使って、今までの経験から、土は絵の具になることを知っていたので、「砕いて絵の具作りをしたい」という子もいた。また、色水をしたいという子や、花を活用し、たたき染めをしてみたいという子もいた。これまで経験してきたことを思い出したり、友だちや保育者と一緒に話をしたりすることで、子どもたちが自分のしたい遊びを見つけたり、考えたり、またそこから“したい遊び”を選択することができた。

【令和5年1月～2月②】 事例3 『色の変化を楽しむもう～ぼくのいろを作ってみたよ！～』

以前の活動を思い出して、「また色水をしたい」「色水作りを楽しみたい」と言った子どもたち。最初はパンジーの花を潰して、水を混ぜ、水の量だけで色の変化を楽しんでいた。そんな時に、「こんなものもあるよ」と、カボスを出してみた。「カボスや！」「色が変わる！」と、以前の遊びで経験したカボスが入ることで色が変わるということを知っていた。すると、「これは、カボスを入れる前。こっちはカボスを入れた後。色変わるの分かるから、半分ずつ残しておく。」「こっちは、リンゴジュースみたいで、これはお酒かな？」と、色の変化を比べながら、できあがった色を飲み物に見立てて遊びだした。「先生、これ、飾りたいな。」「皆に見てもらいたい。」と、次第に、色水を友だちにも見せたいという気持ちを持つようになった。友だちに伝えたいという思いから、見てもらった時にどうしたいか考え、画用紙に作った色水を置き、そこに一緒に色の名前を書くことを思いついた。色づくりをしていく中で、自分だけの色ができて、とても嬉しそうにしていたように感じた。そして、できあがった色水を残したいという思いが生まれ、どうしたら残せるか考え、冷凍庫で凍らせることにした。



【どんないろになるかな】



【ぼくの作った色】

【令和5年1月～2月③】事例4 『砕いてみよう!』

伽藍岳の石を砕いて、絵の具作りに挑戦する子どもたち。堅い石を触り、「本当にこの石から絵の具ができるのかな?」と、不思議に感じている子どもたち。絵の具づくりの前に、「この石で絵がかけるか、紙に描いてみよう!」ということになり、濃い色の画用紙に、石で直接描いてみると、少し硬いがチョークのように色がつく。「うわー本当に描ける」と、実際に描けたことで、“絵具も”きっとできる!と、感じた様子だった。すると、すごい集中力で、拳ほどの大きさのある石を、金づちで何度も繰り返し叩き、細かい白い粉にしていた。一生懸命な子どもたち。その表情は、できあがりの色を楽しみにしているようだった。この作業を3日間も行った子どももいて、遊びに集中していることが見受けられた。砕いた石にのりを混ぜ、できあがった手作りの色で好きな絵を描いた。



【袋に入れ、石を砕く子どもたち】



【令和5年1月～2月④】事例5 『大きなテーブルを作ろう～血の池地獄の泥を塗って完成!?!～』

制作の材料として、大きな板を見つけた子どもたちから、「この木で、テーブルを作りたい」という思いが生まれ、さらにそのテーブルを血の池地獄の泥で色をつけたいという思いに高まり、ペンキ屋さんの始まり。友だちと力を合わせ、様々な形の木を組み立て、テーブルを作り、色を塗った。大きな板は、ローラーを使い、「綺麗に塗ろう!」と、勢いよく塗った。テーブルの脚のパーツはローラーでは塗りにくかったことに気づき、どうやったら塗りやすいか友だちと考え、刷毛で塗ると塗りやすいことに気づいた。木の大きさによって、道具を使い分けながら友だちと作り上げた。できあがったテーブルを見て、次は飾りつけをしたいということで、各自飾りつけたいものを考え、家から持ってきて飾りつけを行った。できあがったテーブルを見て、大満足の子どもたち。



【木材に泥を塗る子どもたち】

きれいに だろをぬろう!!
色を塗って、ボンドでくっつけたよ!

【令和5年1月～2月⑤】

事例6 『ようこそ！年長組の『とくべつな たからもの びじゅつかん』へ！』

「お家の人にも見てもらいたいね」という子どもたちからの声が出てきた。そこで、「2月に参観日を行う際、お家の人に見てもらおうのはどうかな？」と子どもたちに声をかけた。

子どもたちは2学期に大分県立美術館に行った経験があり、そこから美術館みたいに飾るといいのでは？というアイデアが生まれた。そこで、皆の作品を飾る場所の名前を『とくべつな たからもの びじゅつかん』と、付けることに決まった。美術館には作品のタイトルがあったことや、作り方の説明があったことを思い出し、看板や、作品のタイトルなどをお家の人たちに伝わるように作りだした。



紙に作り方を書いて、お家の人に紹介してみよう！！



画用紙に感想を書いたり
写真を貼ったり、子どもたちの
アイデアがいっぱい！！



どんな風に飾ったら
美術館みたになるかな？

はやく、お家の人に
見てもらいたいな！！



泥で作った泥染めや、伽藍岳の石で
描いた絵、押し花…



作った色水は
凍らせて残しておいたよ！



実際に、参観日には沢山の保護者の方が参加してくださいました。参観前後に「とくべつな たからもの びじゅつかん」を子どもたちと一緒に見学する時間を設けたことで、子どもたちが自分で、どのように作ったのか、どんな気持ちで作ったのかを伝えることができた。参観日当日は、「いつ、お家の人が来るんだろう？」と、そわそわして待っていた子どもたち。保護者の方が来ると、「こっちだよ！」「これは、こうやって作るよ」など、喜んでお出迎えをし、作品の説明をした。伽藍岳の石を砕いた子どもは、「お父さんにもどんなふうにしたか教えた」と言い、実演し、その後保護者の方にも体験してもらい、子どもも、保護者の方もとても楽しい時間を過ごすことができた。参観後には、保護者の方にアンケートをお願いし、たくさんの感想を頂いた。

～年長組保護者より頂いた感想～

●R児父

展示された作品やポスターは、とても分かりやすくまとめられており、感心しました。また、実際に石を砕く作業を子どもたちが説明してくれて、私自身も子どもと一緒に体験できたので、短い時間でしたが、とてもいい時間を過ごせました。

●A児母

美術館を見学してみたからこそできた「とくべつな たからもの びじゅつかん」になった、血の池地獄に行ってみて、使わせてもらった泥の作品、全部が一つになった。見る、聞く、知る、色々なことを学べたと思います。

●S児母

子どもたちの、やりたい気持ちに応え、主体的な活動へと導いてくださっている様子がかうかがえました。血の池地獄の泥などは、この地域ならではの特色ある活動で、きっと他にないよい思い出として心に残っていくのではないかと思います。

●Y児母

泥水遊び、色水遊び、染物、落ち葉や石を使った制作…自分の幼いころを思い出し、とても懐かしい気持ちになりました。どの作品も個性豊かで、子どもたちが一生懸命考えながら、楽しみながら作ったんだろうと、貼ってある写真からも伝わってきました。お友だちと協力して作り上げる楽しさや、できあがった時の達成感など、作品だけでなく、その思い出も“とくべつな たからもの”になったのでは、ないでしょうか。

4. まとめ

- 子どもたちは、泥遊びで血の池地獄の泥を身近に感じ、染め物や絵、色塗りに夢中になり楽しんだ。この姿を家庭に発信したところ、これまで着目することのなかった地域素材のすばらしさを共感していただくことにつながった。

※「幼児期の終わりまでに育って欲しい姿」に示されている「社会生活との関わり」につながる姿

- 子どもたちは周りにある色に関心を持ち始めた。色水遊びでは身近にある花や実から抽出される色水作りに熱中した。花や水の量によって色が変わることを体験したり、地域の素材（カボス）を使って色が変化することの不思議さを感じたりして、色水に対する興味が大きくなっていった。友だちとどうしてこうなったのだろうという疑問を「こうなんじゃないか」と推測ではあるが伝え合い、新たな学びにつながったのではないかと感じる。

※「幼児期の終わりまでに育って欲しい姿」に示されている「豊かな感性と表現」「自然との関わり」「思考力の芽生え」「言葉による伝え合い」につながる姿

○ 今まで経験してきた遊びを振り返る時間を設けたことで、子どもたちが“また、作りたい”という、思いを持つことができた。また制作や、遊びをする時間を確保したことで、友だちと自分の意見を交わしながらじっくり作品制作や遊びを行うことができ、満足した気持ちで取り組むことができたと感じる。

※「幼児期の終わりまでに育って欲しい姿」に示されている「健康な心と体」「協同性」「思考力の芽生え」「言葉による伝えあい」「豊かな感性と表現」につながる姿

○ 自分が作った作品を「お家の人に見てもらいたい」という気持ちを持ち、見せる場を設け、どのように伝えるか、飾るかを友だちと一緒に考えたことで、見てほしい人や、見ている人に作り方や、作った時の気持ちを伝えたい、という気持ちが満たされたと考える。

※「幼児期の終わりまでに育って欲しい姿」に示されている「健康な心と体」「協同性」「社会生活との関り」「思考力の芽生え」「数量・図形、文字等への関心・感覚」「言葉による伝えあい」「豊かな感性と表現」につながる姿